

あすばるーん

2026
夏号

No.120



Asuballoon

女性の政治参画

特集!

日本初の女性首相就任とともに考える

三重大学名誉教授 岩本 美砂子さん

世界経済フォーラムが2025年に発表したジェンダーギャップ指数において、日本は148カ国中118位と、G7の中で最下位となっています。分野別のスコアをみると、特に政治、経済分野の値が低くなっており、政治分野では148カ国中125位となっています。なぜ日本では女性の政治参画が進まないのか、女性が意思決定過程に参加していないことでどのような問題が生じているのか、政治分野からみた日本のジェンダーの課題について考えます。

日本初の女性首相就任とともに考える

三重大学名誉教授 岩本 美砂子さん(いわもと みさこ)

1957年広島県尾道市生まれ
京都大学法学部卒業 名古屋大学法学研究科博士課程単位取得退学 法学修士 名古屋大学助手
1986年三重大学人文学部講師 1987年三重大学人文学部助教授 1996年三重大学人文学部教授
2023年三重大学定年退職 名誉教授



ピンチに女性が抜擢される

2025年10月、高市早苗氏が自民党総裁に選出され、国会での指名を経て総理大臣になりました。女性初の首相です。日本の女性議員は少なく、衆議院は14.6%、自民党ではさらにちょっと少ないです。したがって高市氏は、自民党の中で女性の参画が進んだ結果としての首相就任というよりも、党のピンチに対応するための抜擢かもしれません。

女性がなかなか組織のトップになれないことを「ガラスの天井」と言いますが、高市氏のようにトップに立つ女性も珍しくなくなりました。しかし、「平時」に女性が選ばれるというよりも、組織のピンチの時に、まだ少数派の女性からリーダーが選ばれることが少なくないのです。このピンチを、「ガラスの崖」と呼びます。



振り返ると1960年、岸信介首相による日米安全保障条約改定に対して反対運動が盛り上がり、条約は批准されたものの岸首相は退陣しました。次の池田勇人首相は「低姿勢」で世論の沸騰を沈めましたが、その時女性で初めての大臣に中山マサ議員を起用しました。1986年、社会党は衆議院・参議院のダブル選挙で敗退し、2人しか居なかった女性衆議院議員の1人、土井たか子氏を委員長にしました。土井委員長は女性候補者を増やして、マドンナブームを起こしました。

1989年、これに脅威を抱いた自民党は、派閥リーダーではない海部俊樹氏の元、森山真弓議員と民間人の高原須美子氏を同時に大臣にしました。この時初めの内閣官房長官(男性)に問題が起これ、森山氏はすぐに内閣官房長官となり、自民党による女性登用のイメージに貢献しました。また小泉純一郎首相は、2005年に郵政民営化法案が参議院で否決された時に衆議院を解散し、女性候補(郵政民営化反対の候補にぶつけられた、いわゆる「刺客」を含む)を押し出して大勝しました。

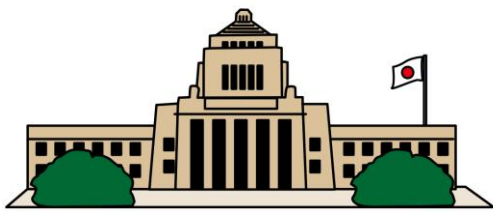
外国の女性首相は…



ピンチの時に抜擢された女性リーダーは、長続きするとは限りません。乗り切ったのは英国のサッチャー首相やドイツのメルケル首相、イタリアのメローニ首相です。サッチャー首相は、英国経済が行き詰まり、保守党のリーダーシップも揺らいでいた時に首相になりました。メルケル首相は、東西ドイツ統合後の難しい時期に首相になりました。ただ、彼女を引き上げたいわば恩人のコール元首相の政治資金疑惑を突く形で、トップに立ちました。イタリアは慢性的な政治危機を抱え、内閣の平均寿命が13ヶ月です。経済も上手く行っていません。メローニ氏は自分で「イタリアの同胞」という右派政党を組織しており、2022年の政府危機の間不人気だった連立政権に参加しなかったことで支持を得て、現在3年半首相の座にあります。高市首相は、彼女たちの仲間入りができるでしょうか。

日本で女性政治家が少ないのは、政党の消極性による

1946年に女性衆議院議員が39人選ばれました。ですが漸減して一桁を低迷、マドンナブーム以降ようやく上昇に転じ、小泉郵政選挙で43人が選出され59年ぶりに1946年の記録を破りました。1946年の女性進出の背景に、選挙制度が注目されます。1946年は戦後すぐで疎開も多く、都道府県が1選挙区(人口の多い所は2区に分割)、議席数より少ないけれど2~3票投じられる、大選挙区制限連記制でした。2~3人の内1人は女性に投票する心理が働いたとか、初めて投票権を得た女性は女性に投票したとか言われました。翌47年から、より小さい選挙区(3~5人選出)とし、1人1票の中選挙区単記制に変わりました。自民党では同じ選挙区で複数の候補者が厳しく争い、そこへの参入は女性には難しかったのです。1996年から小選挙区比例代表連記制となり、女性は中選挙区時代より増えました。



しかし、選挙制度だけの問題でしょうか。1946年4月選挙前の1月、多くの戦前の男性政治家が軍国主義への関与で、占領軍に公職追放されました。この隙間に、女性が進出できました。彼ら「党人政治家」が、1950年頃に復活しました。またその前に吉田茂首相が高級官僚を立候補させ、党人と異なる自分の基盤にしました。この官僚や党人の男性政治家が公認され、女性議員を不利にしました。

他方社会党は、労働組合の男性幹部を議員にしていきました。また、社会主義をめざすのか資本主義内で改良をめざすのか、激しいイデオロギー争いをしていた社会党や民社党では、女性議員の価値は顧みられませんでした。

1950年代に創価学会が文化部を設置して地方議会や参議院に進出、1964年には公明党を設立、参議院や衆議院に一定の議席を占めています。市町村議会に女性が珍しくありません。共産党は1946年に1人、49年には3人女性衆議院議員がいましたが、1950年からの混乱で議席を失い、女性国会議員の復活は1968年です。1980年代前半は、国会議員も他党をしのぎました。しかし共産党に女性議員が多くても自民党は女性タレントの立候補に留まり、女性議員や大臣を活用するのはマドンナブーム以後です。

女性議員は、1989~90年のマドンナブームや、2005年の郵政選挙で伸びました。土井委員長や小泉首相が、女性候補の大幅登用に踏み切ったのです。2009年の民主党への政権交代時にも、「小沢ガール」と呼ばれた女性議員が増えました。政党における党首級による女性登用の決定が、女性議員を増やしました。ただ日本では政党内の女性が候補者選定に関わっておらず、時折党首級の決定で女性が増えるだけで、長続きしません。しかし郵政選挙では、11比例ブロックの内8つで女性が高順位に位置づけられ、小選挙区で負けても当選して、自民党の女性候補は全員当選しました。当時「女性枠」と呼ばれましたが、女性クオータでした。比例を「同一順位」にせず、女性を高順位に置くか男女交互にするという決断が、必要です。



政党がピンチ回避のために女性を抜擢したり、党首が変わると女性登用が終わったりするのは、ダメです。政党として女性候補・議員を増やすことが決定的に重要です。高市首相は、実はクオータに余り積極的ではありません。しかし私たち有権者は、このことを政党に要請し続ける必要があります。



日本における女性議員の比率

～女性議員の比率から日本の現状を考えてみましょう～



1.国会	女性議員割合	議員数	女性議員数
衆議院	14.6%	465	68
参議院	30.0%	247	74
合計	19.9%	712	142

2.地方議会	女性議員割合	議員数	女性議員数
都道府県議会	14.7%	2,599	381
市区町村議会	18.8%	28,696	5,406
合計	18.5%	31,295	5,787

(注1)衆議院及び参議院は2026年2月18日現在の数(衆議院及び参議院HPより)
 (注2)都道府県議会は2025年12月31日現在(総務省調べ)
 (注3)市区町村議会は2025年12月31日現在(総務省調べ)
 (注4)有権者に占める女性の割合:51.7%(総務省「令和8年2月8日執行 衆議院議員総選挙 最高裁判所裁判官国民審査結果調」より)
 出典:女性活躍・男女共同参画の現状と課題(令和8年4月 内閣府男女共同参画局)

～男女共同参画をもっと身近に～ あすばるライブラリー



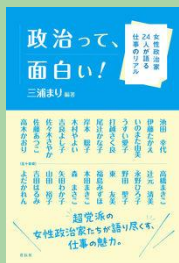
あすばるライブラリーでは、ジェンダー平等を中心とした社会的課題や生き方、暮らしに関する図書等を収集し、皆さんに提供しています。専門書の他、一般の方や子ども向けの親しみやすい図書、雑誌、DVDなどを揃えています。また、男女共同参画に関するテーマや季節、時事に合わせた図書、資料をピックアップした企画展示も行っています。



新着図書や企画展示の情報、蔵書検索はコチラ

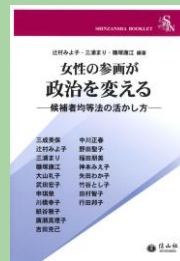


今号で特集した「女性の政治参画」に関する図書のご紹介



『政治って、面白い！
女性政治家24人が語る
仕事のリアル』

三浦 まり / 編著
花伝社



『女性の参画が政治を変える
候補者均等法の活かし方』

辻村 みよ子・三浦 まり・糠塚 康江 / 編著
信山社出版



『世界ではじめての
女性大統領のはなし』

ラウン・フリーゲンリング / 著
朱位 昌併 / 訳
平凡社



『女性のいない民主主義』

前田 健太郎 / 著
岩波書店



『はんなちゃんそらり
総理大臣になりたい女の子と
おばあちゃんおばけの話』

伊藤 孝恵 / 作
松本 えつを / 絵
三恵社



『新版 中絶と避妊の政治学 戦後日本の
リプロダクション政策』

ティアナ・ノーグレン / 著
岩本 美砂子 / 監訳
塚原 久美・日比野 由利・猪瀬 優理 / 訳
岩波書店